

70年代が終わり 80年代に入った頃、もうすぐ 20 歳を迎えようとしていた
ベッドタウン所沢のロック少年たちの眼前には
果てしない広大な道が広がっていて
それはどこに継ってるのか想像もできないほど長くも感じた。
そしてそんな道を彷徨うように生きていた。
それを後押ししていたのが
ドゥービーやオールマン、レイナードやイーグル、J ガイルス、スプリングステ
ーン・・・当時まだ勢いのあったロックバンドたちだった。

いくつかの学校の「上手いやつ」が出会い意気投合して共に彷徨うべく結成し
たのが J-Street R&R Band だった。1981 年の夏の頃の話。

タイトなリズムの上に、パワフルで荒々しくシャウトするボーカル、お互いに
呼応して緻密なフレーズを奏でるツインリードギターが特徴で、その楽曲のア
ンサンブルの完成度の高さと演奏力で小さな街、所沢ではあつという間に名の
広まるどころとなった。

メンバーの元質屋だった実家の名残の土蔵があって、そこで時間を気にするこ
となく練習できたことが大きな要因としてあった。
50 度を超える真夏、0 度を下回る真冬、若さに身を任せて夢中になって練習に
励んでいた。

都内のライブハウスなどに活躍の場所を求め、やがてメンバーの頭の中では「デ
ビュー」という目標が明確になっていく。
当時アマチュアバンドの登竜門として大きな存在だった YAMAHA EAST
WEST に応募したのは自然の流れだった。
初めて応募した 82 年大会、二度目の 84 年大会とも埼玉県を勝ち抜き中野サン
プラザでの全国大会出場を果たしている。

結局 J-Street R&R Band の「デビュー」という目標は儚い夢と終わったが、数
年後にメンバーのうち 4 人が在籍する「MARO」というバンドでポリドールか
らデビューを果たした。

その後音楽を生業にした者、子沢山の家庭を作った者、ニートのような生活を貫いたもの・・・それでも何らかの形でロックミュージックに携わりながらあつという間に30年がすぐ去った。

けっしてノスタルジーではないが50歳も半ばを過ぎた頃、また「あのバンドの音を出したい」という思いがほぼ同時に皆の頭に浮かんできたようだ。

ばらばらになったメンバーがお互いに連絡を取り合おうとしていた矢先中心メンバーであり絶対的なボーカルだった吉角忠磨がこの世を去った。2016年のことであった。これでバンド再会の野望も潰えたに思えたが、天のいたずらなのか与えられた使命なのか、忠磨には声も顔もよく似た秀磨という弟がいた。

そして彼は精力的に歌い手として自らのバンドを率い音楽活動を続けていた。

道はつながっていたのである。ただしあの頃のように果てしなく続いているとは思えない。

2017年の吉角忠磨のトリビュートライブをきっかけに、弟、吉角秀磨を迎えて再び走り出した **J-Street R&R Band**

声と顔は似ていても兄とは違う音楽的世界観を持つボーカルを看板に据えたこのバンドが、今後どのような「道」を疾走していくのか、ぜひ並走して見届けて欲しい。できれば停車するまで・・・

J-Street R&R Band are

現メンバー

伊賀武氏（リードギター、ボーカル）1981～

荒井謙次（リードギター、ボーカル）1981～

平岡利之（ベース、ボーカル）1981～

小原智雄（ドラムス）1981～

吉角秀磨（リードボーカル、ハープ、ギター）2016～

伊東昌喜（キーボード、ボーカル）1982～

ex

* 吉角忠麿（リードボーカル、ギター）1981～1984（2016年死去）

* 清野史郎（リードギター）1981～1982